本興寺だより

令和二年
七月
第二一一号

「私は深くあなた方を心の底から敬っている。決して軽んじたり侮りはしない。なぜなら人は皆仏の教えにそって（菩薩の）修業をしていけば必ず仏になれるのを知っているから」（法華経　常不軽菩薩品第二十）

人は対人関係で悩むことがよくあります。自分と違う相手の個性を素直に認めることは容易ではなく理解出来ないと思うからです。

仏様は、まず自分の中にある尊い命に真から気づき、その命がご神仏の命とも、他の人の命とも、自然界の生き物の命とも根底で通じていることを知ることが大事なのだと云われます。

自分の命は他から独立した単独の命であると固執すれば、孤独にも、傲慢にもなる芽が顔を出し易いのです。

人の命は何度も輪廻（生まれ変わり）を経験すると云われますが、お釈迦様の前世のお話を記したジャータカ物語（お経）に次のような話があります。

昔インドにシビ王という王様がいた。ある日お城の窓から一羽の鳩が入ってきて、「王様、助けてください。今私は鷹に追われて逃げてきました」と言った。王が鳩をかくまったところに鷹がやってきて、「シビ王よ、今ここに逃げてきた鳩を私に返してほしい」と言った。今鳩を返せば食べられてしまうと思った王は、「返すことはできない」と言った。鷹は「私は何日も食べていないのでこのままでは死んでしまいます。王様、あなたは慈悲深い方と存じていますが、鳩は助けて私は死んでもかまわないというのですか？」と問います。シビ王はその言葉を聞いて困惑するも、意を決し、「それでは私の肉を食べてもらおう」と言って、自分の体の肉を鳩の大きさだけ切り取って与えました。しかし鷹はまだ足りないと言って納得せず、何度肉を増やして天秤で重さを測っても鳩の方が重く、最後に王様が鳩を救うため全身を鷹に与えるつもりで秤に乗った時、はじめて鳩の重さと釣り合ったのです。

その時、鷹に身を変化していた帝釈天（神）が本来の姿を現し、「シビ王よ、あなたはみんなの命の重さが同じことと、その尊さに気付かれた」と述べ、王を敬い傷を元通りに癒されたのです。シビ王とはお釈迦様の前世です。この教えは、私達に啓示を与えています。人は皆尊い命だとは思っていても無意識の内に命を差別し、区別をし、序列を作っているのです。同じ動物でもペットとして大事にされる犬や猫。食用として殺される牛や豚。人間の都合によって生かされる命と奪われる命があります。人の体は動物や植物、魚等たくさんの命が溶け合って生かされています。（命を）「いただきます」という、食事前の言葉に込められた感謝の気持ちを忘れないことが大事なのです。

また人は関心のある命は優先的に大切さを感じますが、それ以外の命には無関心なのです。日本でコロナウイルス感染症でこの半年に約千人が亡くなっています。大変身近に危険を感じます。しかしこの間に自死された人は十倍の一万人おられるのです。戦後の水子の命は累計で一億人近くになると云われています。これらの命は自分に関係なければ他人事であり無関心になり、ともに大切な命の重みがあるにもかかわらず、その防止と啓発に立ち上がる人はごく少数です。個性の違いと関心の有無を超えて、人は皆神の子・仏の子であることを本当に自覚できた時に、他の人と助け合い、支え合う心が育ち、喜びも悲しみも我が事と同じように受け止められるのだと云われます。

他人とのトラブルは己の心と体を蝕み、他人との助け合いは自身の心身に安らぎと力を与えます。

古代のバビロニア初代王のハムラビ法典に有名な「目には目を・歯には歯を」という言葉があります。この法典は本来復讐を勧める法ではないのです。

「目には目を歯には歯を」というのは、「復讐は慎むべきものなれど、例え行使してもせめて同じ程度の、目をやられたら同じ目までで留めておけ。復讐し過ぎるな」ということなのです。天秤が釣り合うように。

今月から七年ぶりにテレビで放映される「半沢直樹2」。前回は「やられたらやり返す、倍返しだ」の台詞に共感する人が多く高視聴率だったのは、人間は受けた恨みは必要以上に返したがる心があるからです。しかしそれ以上返せば、被害者が次は加害者に、加害者が被害者にと、この世でもあの世でも「業」が輪廻すると云われます。どこかで憎悪の連鎖を断ち切るためには倍返しはいけないのです。倍返しの気持ちはお茶の間のドラマの中だけで留めるべきなのです。

私たちが生きる上で持つべき心は、片方に自分を、他方に他の人を乗せて共に公平で公正に釣り合う天秤の心を見失わないことなのです。どんな人とでも。優越感も劣等感も天秤が傾くのです。

冒頭の不軽菩薩は出会う人々を区別なく拝み、例え罵倒されてもその人に対する深い敬いを欠かさなかった。それはその人の心の奥に持っている尊い仏の姿が見えたからなのです。その仏性に気付かず己を見失って生きている人への生き方の反省を促すためでもあったのです。合掌　　本興寺住職　中　谷　聰　秀

本尊に合掌すれば信心となり
父母に合掌すれば孝養となり
長上に合掌すれば敬慕となり
事物に合掌すれば慈愛となり
自分に合掌すれば修養となり
互いに合掌すれば幸福となる